

1. 平成23年度教育改善向上（FD）活動の概要

—PDの浸透に向けて—

（1）FD委員会のこれまでの取り組みと今年度の活動

東京未来大学は、子どもに関わる専門家を養成する目的として平成18年に設立された4年制大学であり、平成22年には初の卒業生が誕生した。平成24年度には新たにモチベーション行動科学部が設立され、子どもから大人までのすべての人を育てる人材養成に力を注いでいる。本学の特徴としては、「技能と心の調和」を建学の精神とし、クラス制（約40名クラス）を導入し、各クラスに教員である担任と職員からなるキャンパス・アドバイザー（Campus Adviser; 以下、CAと呼ぶ）を置き、教職員と学生の距離が近い少人数教育を行っている。さらに、大学入学という入口から大学卒業という出口までの総合的な教育を目指しており、入学前教育、リメディアル教育、基礎科目、専門科目、キャリア教育など縦横連携しながらの学びの場所を創りだしている。

本学のFD委員会は、平成18年の開設年度から教員向け研修や、相互の授業参観など活発なFD活動を行ってきた。平成19年度は、研修会の実施や授業評価アンケートの実施、平成20年度には、FD委員会を中心として、建学の精神を実現すべく、「汎用的スキル（7カテゴリー、20項目）」「専門的子ども指導力（4カテゴリー、21項目）」「専門的知識・技能・態度（5カテゴリー）」といった3つの側面からなる学士力を想定し、それぞれのリストを作成した。平成21年度には、学士力の主観的評価、平成22年度には、授業連携を通じた学士力向上の試みやC-learningを活用した授業展開に力を入れてきた。

このように開学当初から活発に活動してきたFD委員会であったが、平成22年度に大学の完成年度を迎え、今までご尽力いただいた先生方がご退職を迎えられ、本年（平成23年度）は、大幅な人事異動が行われるとしとなった。本年（平成23年度）は、完成年度以後の人事異動が行われた。つまり本学が目指すFD活動について再度教職員に共通理解を図ることが急務であった。そこで本年を迎えるにあたり、まずはじめに大学全体の教職員が一同に集まる会議を利用して、全教職員に対して本大学が目指すFD活動の方向性である「FDを超えたPD概念の共有化」、「学士力向上に向けた汎用的スキルを意識した授業連携」を説明した。その上でFD委員会としては、学士力向上を実現化するために、授業改善に向けて授業参観や双方向的授業に向けての基盤整理、ICTを活用した双方向授業の試み、授業改善に役立つアンケートの実施など新たな試みを行った。

全体会議を通してFD活動の方向性を共有化した後、まず取り組んだのが教職員による授

業参観の見直しであった。初年度活発に行われていた教員相互の授業参観は、その後も引き続き行われていたが、期間を限定しない自由参観としたために参加率が低下していた。そこで本年度は春学期と秋学期に約2週間という期間を限定し、全教職員による授業参観の実施を決定した。授業参観の感想はFD委員会で取りまとめ、大教室、小教室という教室形態別に特徴をまとめ、教員全員による閲覧を行った。

このように教員も職員もお互いの授業を参観し、気づいた点を指摘しあう、また自ら足りない部分を学びあうということを通してFD活動の浸透を図っていった。よりよい授業の課題としては、教職員と学生が一体となって授業を作り出すという作業が不可欠であるが、本年度は、その試みとして授業評価アンケートの自由記述部分を授業終了後に実施するのみでなく、15回の授業の途中で実施し、学生の声に耳を傾けその声をすぐに授業に反映させるという試みを実施した。また授業中においてもコルズシステムを利用して教員と学生の双方向の授業づくりを意識した。

1) 科学的知見に基づいて

上述のように大学全体で学士力向上に向けての試みを行っているが、「本当に学生の実態に合っている授業なのか」「学士力は本当に身につけているのか」という声が上がっていた。そこで本年度は、学生の実態把握を行うために、入試形態や専攻などとGPAの関連を調べ、データを踏まえて議論を深めた。さらに学士力形成を把握するために、学生に対する主観的な評価のみではなく、学士力のカテゴリーに基づいた客観的試験を実施し、その特徴を分析した。

同様な試みがキャリア教育のほうでもなされており、学生の基礎学力、学生のキャリア意識、大学への満足度などを全国と比較可能なデータを得ることができた。本年度は、キャリア側面のデータ、学士力に関するデータのそれぞれの分析で終わってしまった感があるが、これら両者の資料を統合して、学生の実態やニーズを把握し、よりよい授業づくりやPD活動に生かしていくことが期待される。

2) さらなる飛躍へ

平成24年度に向けて、現在検討されていることは、次の3点である。①授業評価アンケートをより活用するために、全教員の授業評価を公開すること、②授業評価の高い教員の授業内容を授業研究の対象とし勉強会を開くこと、③学士力を軸とした授業履修ができるため、各授業と学士力との関係をシラバスに掲載することである。

上記以外にも、本大学が求める学士力の育成は、教員が提供する授業、CAを中心に行われているキャリア教育の授業（College & Career Skills: CS）、チームビルディングとし

ての大学の行事（三幸フェスティバル、学園祭、謝恩会）という多角的かつ総合的な視点から捉えられる必要があることは前述したとおりである。キャリア教育やチームビルディングとしての大学行事をPDとしての評価や実践にどのように位置づけるのか、またそれらの質を高めるために何ができるのかという問いに答える必要があるであろう。